

動物をめぐることばと表現（3）

一犬の訓練になぜ英語を使うのか

佐々木 恵理

1. はじめに

日本でのコンパニオンアニマル（ペット）の飼育は一過性のブームなどではなく、もはや定着した感がある。中でも犬は、身近な使役動物、共生動物としての歴史が長く、人間と密接なコミュニケーションをもちうる動物である。警察犬を初め、盲導犬、介助犬などの使役犬⁽¹⁾の活動は、人間と犬との関係性をよく表している一例であろう。

一般の家庭犬であれ使役犬であれ、犬との適切な関係作りには訓練⁽²⁾がかかせない。その際、犬に対するコマンド⁽³⁾になぜ日本語ではなく英語を用いる場合があるのであろうか。そして、一般に説明されている理由は、どの程度説得力をもつのだろうか。本論では、一般の家庭犬と、補助犬である盲導犬と介助犬について、犬の訓練に英語が使用されている現状を詳述し、その中に潜む英語支配を分析したい。

2. 犬の飼育と訓練に関するこれまでの経緯

1980年代以前にも何度か特定犬種のブームがあったが、1980年代後半ごろからはシベリアン・ハスキー、次いでゴールデン・レトリバーといった比較的大きな犬種が、近年は、ミニチュア・ダックスフントやチワワなどの小型犬種が人気である。犬の飼育に関する意識の欧米化と外国原産の純血統種が増えるにつれ、犬を庭先や玄関先につないで飼ったり放し飼いにしたりすることに對する心理的な抵抗が強くなり、特に都市部とその近郊では、室内飼育が一般的になってきた。

一方で、社会化⁽⁴⁾の問題も含めて、飼い主がリーダーシップをとれずにいると、犬はさまざまな問題行動⁽⁵⁾を引き起こすことになる。そして、室内外

での無駄吠え、犬や人への咬傷といった地域社会を巻き込む問題も起こってくる。これに集合住宅での飼育の問題もくわわり、人と犬が共生するとはどういうことかということを実を真剣に考える必要性が生じたのである。

そうした社会の静かな要請もあってか、1990年代に入ると犬の行動学や訓練に関する本や、人と犬の関係論がぞくぞくと出版されることになる。中でも特に犬の問題行動の矯正方法についての本は英語圏からの翻訳本が圧倒的に多い。これは従来の飼育本とは異なり、犬とはどのような動物でどのような習性があるのかという行動学的視点を取り入れ、それに基づいた訓練法を紹介するものである。こうして欧米式の「叩かずにほめてしつける」といったより非暴力的な方法が日本での犬の訓練を大きく変えることになる。また、補助犬を使った障害者の自立がテレビなどのマスメディアで繰り返し取り上げられ、そうした犬の姿を通して、改めて「犬を訓練する」という事実を広く世間に知らしめたとも言える。

家庭犬にしても補助犬にしても、現在一般的に用いられている訓練法はもとも欧米から輸入されたものがほとんどである。これに関しては、欧米崇拜や西洋文化至上主義的な意識から日本に導入されてきたというよりも、欧米の方が（特に外国種の）犬の飼育や訓練に関してより合理的で具体的な方法論をもっているという、もっぱら実際的な理由からだと考えてよい。

3. 犬の訓練とコマンド

日本であえて英語を使って犬を訓練しているからには、何かのきっかけがあるということである。家庭犬の場合は、訓練学校やしつけ教室、または参考にした訓練の本で英語が使われていたか、飼い主が自分の意志で英語を使ったという理由が考えられる。補助犬の場合は、訓練センターで訓練士が英語を使って訓練し、それを使用者（障害者）がそのまま使うという理由のみである。問題にしたいのは、そうした訓練士や本の著者はなぜ日本語や他の言語ではなく英語で訓練することに決め、また人に薦めているのか、またなぜ飼い主自身が英語を使うことに決めたのかということである。

ここで、コマンドを使うという点から犬の訓練について概略を述べたい。

ひとつめは、犬がどのように人間のことばを認識しているかについてである。犬は人間が用いていることばの意味ではなく、特定の動作とそれにあてられたことば（音）を関連づけて覚えてゆく。例えば犬に座らせたいときに、「きれい」（形容動詞）と教えても「がっこう」（名詞）と教えても、「座る」という動作に関連づけて覚えさせれば犬は座る。呼び戻すときに「まで」、待たせるときに「こい」と反対の動作のことばで教えても、そのようにコマンドが記憶され機能すればよい。だから、コマンドは犬にとってどのようなことば（音）でもよいことになる⁶⁾。また訓練では、声符（ことば）だけではなく視符（身振り）も用いるのが一般的である。

ふたつめは、指示の出し方である。訓練では「ひと動作につきひとコマンドをはっきりと1度だけ」が鉄則である。ある動作にいくつものことばを当てたり、何度もコマンドを繰り返したり、文章で話し掛けたりすると犬は混乱する。つまり犬には、あることを示すことばは1度しか言わないことを理解させ、コマンドの示す意味を確実に覚えさせる。この点コマンドは「専門語」（テクニカルターム）であり、人間にとっては日常語と意識的に区別して使うべき種類のことばである。

もちろん、犬は人間の視線や態度、その場の状況もよく観察しているし、訓練が進み、人と犬との関係が確立してゆくにつれ、人間が発することばの語感や癖も聞き分けることができるようになる。だから犬が一旦ある動作とコマンドを結びつけて理解した後は、コマンドの前後に多少のことばがついていても、「はい、すわれ、でしょ」のようにコマンドの部分さえ明瞭に発音すれば問題なく反応する。逆に、いくら正しいコマンドをかけても、その人の発音が明瞭でなかったりつぶやくような声だったりすると、犬には理解できないことも多いし、コマンドを出す人間に自信がない様子が見えたり、犬がその人を信頼できる人だと判断できないと、コマンドの意味が分かっているにもかかわらず従わないこともある。要するに、如何に決められたコマンドを意識的に出すかというのが重要である。

具体的な検証に入る前に、基礎訓練で一般的に用いられているコマンドを簡単に説明しておきたい。英語のコマンドを用いている人の多くは英語を日

本語読みして発音しているので、カタカナ読みを併記する。

呼び寄せる→ こい : come (カム)

座らせる→ すわれ : sit (シット)

伏せさせる→ ふせ : down (ダウン)

待たせる→ まて : wait (ウエイト)

その場を離れずに待たせる→ まて : stay (ステイ)

歩き始める→ こい、あと(へ) : heel (ヒール)

左側について歩かせる→ つけ、あと(へ) : heel (ヒール)

ほめる→ よし : good (グッド)

叱る→ だめ、いけない : no (ノー)

許可する→ よし : ok (オーケー)

4. 訓練に英語を用いる理由とその検証

(a) 家庭犬の場合

家庭犬の場合は、散歩や犬の仲間の集まりやイベント、訓練学校（しつけ教室）での様子、テレビや犬の雑誌や本の情報から、飼い主が犬に英語でコマンドを出している実態が分かる。以下に、なぜ英語を使うのかに対するこれまで耳にした理由を挙げてそれぞれに反論を試みる。

(1) 日本語より英語の方がはっきりしていて犬に分かりやすい

「はっきりしている」が何を基準にしているかは不明だが、しいて言えば、英語の場合、1音節の単語にはアクセントがひとつしかないので母音がそっだけ強調されて明瞭に聞こえるとは言えるかもしれない。だがたとえ日本人が“come”（[[kʌm]]）と英語で言おうとも「カム」（[[kamu]]）と日本語で言おうとも、「こい」（[[koi]]）と言った場合と音の明瞭さには差異はないであろう。「ウエイト」（[[ueito]]）の場合なら、「まて」（[[mate]]）の方が短くてはっきりしていると言える。

(2) 英語は日常の日本語の中に混ざらないので犬に分かりやすい

これは、英語のコマンドを専門語として際立たせ、犬に普段聞こえてくる

日本語の音と区別させるという意味である。例えば家に来客があつて「どうぞお座りください」と言ったときに、犬がその文中の「おすわり」ということばに反応して混乱しないように、“sit”だけが自分に向けられたことばであることを理解できるようにという配慮である。

日本語の動詞は「座り - /座った - /座る - /座る - /座れば - /座れ -」のように活用変化し、同じ音は「すわ」の部分である。一方、英語の動詞は“sit / sits / sitting / to sit”のように語形変化し、中心的な音はどれも[sit]である。こう考えると言語的な特徴によって混乱しやすいのはむしろ英語の方であろう。例えば犬のそばで、「それで、(彼女は) 犬にそこでお座りしてなさいって言ったんだって」と“So she told her dog to sit down there”と言った場合を比べてほしい。犬にとって区別するのが難しいのはどちらであろうか。

日常語に混ざらずにコマンドとして音を際立たせるという側面から言えば、ひとつひとつの単語が独立して発音されることが多い英語のほうが音としては紛らわしい。だが、英語圏で英語を用いると犬が大混乱に陥ったという話は聞いたことがない。もしそういうことが起こるのであれば、英語圏では、例えばまったく音や表記文字の違う韓国語が伝統的なコマンドとして使用されてきたはずである。

(3) 日本語より英語の方がひとことで言い切れるので言いやすい

英語の場合は、1音節の単語がコマンドとして使われているので、それを「ひとこと」と表現しているのであろう。だが、日本語のコマンドもひとまとまりの単語であることに違いはなく、そのほとんどが2拍か3拍の音なのでやはりひとことで言い切れる。また、コマンドを英語で“wait” ([weɪt]) と出すのならばそうした言いやすさを強調することもできるが、日本語の「ウエイト」 ([u-e-i-to]) では4拍もある比較的長いことばになってしまう。

(4) 英語は日常で使う日本語と区別できるので言いやすい

日本では家庭犬を訓練して飼うという考え方がようやく定着しつつあるという状況である。そのため訓練は初めてという人も多く、犬に分かりやすい

ようにコマンドを出せない人が多い。訓練の場で「ひと動作につきひとコマンドをはっきりと1度だけ」が強調されるのはそのためである。こうしたことばの揺れを初めからなくすために、人間の方が日常語とコマンドを区別して使えるようにというのがこの理由の意味である。

この理由は一見信憑性があるように思えるのだが、飼い主が専門語のコマンドを区別して使えないのは、コマンドを出す技術の問題であって、コマンドが何語であるのかといったこととは無関係である。飼い主の技術を補うためにコマンドと日常語とを完全に切り離す必要があるのであれば、すでに英語圏で実践されているはずである。仮にそうだとすると、日本ではよく耳にする英語より、まず使うことのない少数言語の方が有効だと言えるが、補助犬の場合は使用者が多くのコマンドを覚えなければならないという視点から反論もあるであろうから、これについては後述する。

(b) 補助犬の場合

訓練ということから言えば、家庭犬と補助犬との大きな違いは飼育者である。一番歴史が長くシステムが確立している盲導犬⁽⁷⁾を例にとると、仔犬時代から盲導犬としての役割を終えるまでに少なくとも3人中心的な飼育者が変わり、この間すべて共通のコマンドを用いる必要がある。まず「繁殖ウォーカー」の繁殖犬が産んだ仔犬は、生後2ヶ月ごろ「パピーウォーカー」と呼ばれる飼育者に渡され、ここで仔犬は日常生活の中でごく基本的な訓練を受ける。生後1年ごろ仔犬は訓練センターに移され、訓練士によるおよそ1年間の本格的な専門訓練を受けた後、盲導犬として使用者（障害者）に譲渡される。

障害者自立のための補助犬のうち、聴導犬の訓練⁽⁸⁾には声符を用いないため除外し、盲導犬と介助犬に関する記述をインターネットで検索した⁽⁹⁾。その中から英語で訓練することについての説明⁽¹⁰⁾をまず引用し、次にそこで挙げられている理由をまとめながら反論を述べたいと思う。

- ・ 訓練には、方言や男言葉や女言葉の問題からSit（座れ）、Down（伏せ）、Wait（待て）などの英語が使われます。（財団法人関西盲導犬協会）

- ・盲導犬の訓練で使われる号令はすべて英語です。日本語は、男性と女性では使う言葉がちがいます。また同じ意味の言葉でも「お座り」と言ったり「座れ」と言ったり、人によってさまざまなので、犬の混乱を避けるため英語の単語「シット」で統一しているのです。(財団法人福岡盲導犬協会)
- ・日本語には『男言葉』と『女言葉』があります。男女どちらが使ってもおんなじで、周りのひとが聞いてもあまりきつく感じない、簡潔な言葉ということで英単語を使用しています。(財団法人アイメイト協会)
- ・介助犬への指示は、動詞は英語、名詞は日本語で行われます。日本語の動詞には沢山の言い回しがあるため、英語の方がわかりやすいからです。例えば、「新聞を持ってきて」なら「Take 新聞」といいます。トレーニング終了までに、約60の動詞と、30の名詞を覚えます。(介助犬協会)
- ・トレーニングのときには英語を使います。なぜなら日本語では男性と女性で言葉の使い方が違いますし、その時の気分によって命令したり、お願いしたりします。「来い」「来て下さい」など) その点、英語は男性女性ともに同じ言葉を使います。犬は人間が言う言葉を意味で覚えるのではなく、音で覚えます。だから動詞は英語を使います。名詞(物の名前)は、それほど人によって言い方は変わらないので日本語で言います。(介助犬協会)
- ・方言や男・女ことば、言い回しなどの問題から、レシピエント(使用者)には動詞は英語で覚えてもらうが、名詞までは大変なので日本語である。(介助犬協会)⁽¹¹⁾

(5) 英語なら方言による混乱が避けられる

例えば訓練士が共通語で訓練をして、使用者が方言を用いた場合を想定しているらしい。これも、使用者が日常の会話で方言を使っていることと、コマンドを覚えることは別の問題である。例えば秋田の人が日常的に「(こっちゃん) け」「ねまれ」と言っているからといって、「こい」「すわれ」というコマンドと混同するとは考えられない。意識して「こい」と言えないのであれば、

“come”とも言えないはずである。

アクセントについては、日本語の訛りが極端に強いと、その人が外国語をカタカナとして発音する際に外国語にも日本語の訛りが混じることがある。また、地方によっては外来語を平板に発音する人もいる。そうだとすると、訓練士が犬に共通語アクセントで頭高に「ダウン」と教えても、使用者がことばを平板に言う癖が取れなければ、方言によるアクセントの混乱は避けられない。

別の視点から見てみよう。聞いている限りでは、訓練士も使用者もその人固有の発音をしていることがほとんどで、およそ次の3つに分類できる。ネイティブの発音に近い人、日本語発音の人、自己流にアレンジした発音の人である。特に自己流の人の発音は、英語として発音しようとしてそれができていない場合と、発音は日本語だがリズムの中に英語のアクセントが混じる場合とがある。いずれの場合も独特の癖があって「変な英語」に響く。

盲導犬のコマンド「まっすぐ歩け」（発音記号は、上記の3分類の順）

straight go: [stréit-góu]; [sutoreito-gō]; [*stjurléits-gō]

介助犬のコマンド「引け／よくできた」（同上）

pull/good girl: [púl/gúge:rl]; [puru/guddogāru]; [*púrl/gúguær, gugā]

もし、方言と共通語の音の違いを問題にするのであれば、こうした英語発音のバリエーションがあることも問題になるはずだ。だが実際には、中心的な音が保たれていれば犬は経験的にそれをコマンドとして理解できるので問題は無い。したがって、犬が多少の方言（アクセント）の違いで混乱するということはないとも言える。

(6) 日本語には男ことばと女ことばがある

これは、女性なら「いらっしゃい」「いけないでしょ」、男性なら「こいよ」「だめだろ」と異なる表現を使ったり、「待っててね」「待ってろよ」と性別によって終助詞の違いが出たりすることを指している。まず前提として、特定の専門語を決めるときに、「女／男ことば」を視野にいれるということはある

えないし、日本語でも訓練に用いることばは基本的に命令形が用いられていて、そこに性差が出るはずはない。

また、確かに日常語としてはそうした性別による差異が出る状況は予測できるにせよ、性別によって「使う言葉がちがいます」と断言することはできないだろう⁽¹²⁾。特に1990年代以降は性別によることばの区別は日常的にはなくなりつつあると言えるし、テレビのドラマでも「男のように話す女」や「女のように話す男」もよく描かれている。

もちろん「こい」「すわれ」「とまれ」ということばが命令口調で「男らしい」ことばだと感じられると、女性の中には口に出しにくいという人があるかもしれない。だが、男性がこうしたことばを「暴力的で威圧的だ」と感じて口に出しにくいこともあるはずだ。どちらにしても、性によることばの差を問題にするのであれば、より性中立的なことばを探せばよい。「おいで」「おすわり」「そのまま」など、コマンドになりうることばは日本語の中にいくらかでもある。

(7) 日本語では人によってある動作を命じるときの指示語が異なる

日本語には、語源の同じ「すわれ」「おすわり」(座る)や、語源の異なる「こい」「きて」(来い)、「おいで」(出る)、「いらっしゃい」(入る)といった同じ動作を指す別のことばがあるのは確かである。では、英語にはこういう語彙の形態がないから、誰もが同じ指示語を使うかといえばそれは違う。

英語はひとつひとつの単語が独立して並べられて用いられるために、他動詞が前置詞(句)を、自動詞が副詞(句)を伴うことも多い。例えば、普通座ることを相手に促すときには、“sit”では直裁的な命令口調に響くから、“sit down”か“sit on ~”と言うのが自然であろう。だから人によっては犬に“sit”ではなく“sit down”([sidáun])というコマンドを使っても不思議ではない。

また英語には“up/down”(上へ/下へ)といった副詞で運動方向を示すことがよくあるので、英語でコマンドを新たに作り出すときには配慮が必要になる。次は音(声符)だけを手がかりにする目の見えない犬を訓練する本か

らの引用である。

段を上り下りする意味で使うコマンドを事前に決めておくこと。こうした手がかりは外で道の段差を上ったり下ったりするときにも使える。人前で言っても気にならないことばを選ぶこと。もしあなたの犬が“lie down”（ふせる）の意味で“down”ということばに反応するのであれば、段を下りるという意味で“down”を選んではいけない。

段を上がるには、“up”（上へ），“curb”（段差），“climb”（登れ），“step”（段），“stairs”（階段）といったことばが、段を下がるコマンドとしては“descend”（降りろ），“drop”（下りろ）などが使える。実際には、段を上り下りする動作をひとつのコマンドですませる飼い主もいる⁽¹³⁾。

また逆に、“up”ということばからどのような動作を連想するかを考えてみると、犬が「階段を上がる」、「家の2階に上がる」、「ソファに上がる」、「(四足で)立ち上がる」、「(前両足を)上げる」と人によって解釈はさまざまであろう。つまり、英語でもその指示語が何を指しているかの判断はその人による。英語圏では訓練の歴史が日本より長く、コマンドが定着しているので、コマンドとして適切なことばはそれしかないと感じるだけではないだろうか。

(8) 英語の方が日本語より「きつく感じない」

どのように響くのかという点で言えば、日本語とは発声法が違い、ひと単語ごとにアクセントのある英語の方が「きつい」と感じられるのが一般的な見方である。この理由は、盲導犬と歩いているときに「あるけ」とコマンドを出すと、命令口調が目立ってしまい恥ずかしいという心理的な側面のことであろう⁽¹⁴⁾。単純な命令形のコマンドを使うと確かに語感ばかりきつく感じられる。そうであれば解決法は簡単で、動詞には終助詞「て」をつければ聞いた印象は柔らくはずだ。むしろこうした動詞の変化形は英語にはなく、英語の場合は“please”（お願い）をつけるか、文章にしないと耳に優しい「依頼」の文は作れない。

日本人はその意識の奥底に「沈黙は金」という美德を未だにもっていて、

一般に主張することをよしとしない。またあまり極端な感情表現をしないので、日本人は無表情だとも言われている。そこで犬の訓練の場では「恥ずかしがらずに大きな声で犬に声をかけること。特にほめるときは大げさに」と言われている。そう考えると見方によっては、人ごみで「ひだり、あるけ」と日本語で言うよりも、「レフト、ゴー」と英語で言う方が断然目立つし、犬が段差を知らせたときに「よし」と言うより「グー（ツド）」と言う方が恥ずかしいとも言える。

結局、心理的にきつく感じるかどうかということは、コマンドの言語の問題ではなくて、日本人のメンタリティと犬に関する文化の問題と言えそうである。今後、犬連れの人々が公の場でコマンドを言うことがあたりまえになり、また補助犬の使用者が増えてゆけば、コマンドを出すという行為に対して今ほど注意が払われなくなるに違いない。

(9) 英語は簡潔なことばである

ある特定の言語が「簡潔」であるかどうかをどのように計ればよいのであろう。他言語や他文化、産業社会との接触をほとんどしてこなかった少数民族の言語における語彙の少なさをもって簡潔と言えるのだろうか。これに関しては、本論すべてをもって反論としたい。

(10) 日本語の動詞にはいろいろな言い回しがあるので英語を、名詞は人によって言い方は変わらないため日本語を使う

まず、説明されている「動詞を英語で、名詞を日本語で」は、正しくは「基本的なコマンドは（どのような品詞でも）英語で、その他は日本語で」が正確である⁽¹⁵⁾ことを前提としたい。

英語でも人によってある動作を命じようとして思いつく指示語は異なる。例えば、介助犬にもものを取らせようとして言うコマンドとしては、“take”（取る、手に取る）、“pick”（拾い上げる、取り上げる）、“get”（取る、手に入れる）、“fetch”（取ってくる、持って来る）、“have”（持つ、持つておく）、“bring”（持つて来る、運ぶ）のどれでも差し支えない。どのようにものを取ってその後どうするかによって選択する語は変わるであろうし、どの動作とどの動

作をひとつの動詞の意味とみなすかは任意である。語彙についてはどの言語にもそれぞれ特徴があり、ある一部分だけを取り出してそれを単純に比べることはできないことが分かる。

名詞の「言い方」については、どの名詞を使うのか、またどう発音するのかという2つの問題がある。靴下類を「靴下」と呼ぶのか「ソックス」と呼ぶのか、筆記具を「ボールペン」や「ペン」と呼ぶのか「鉛筆」と呼ぶのかは人によって一定ではない。また、使用者にそった訓練をするとは言え、訓練士が東京アクセント、使用者が関西アクセントの場合は、発音が変わるとも言えるであろう。この理由からは、「方言があっても、名詞は日本語を使う」と解釈でき他の説明と矛盾する。あるときには英語使用を強調し、あるときには日本語でよいとすることには明確な理由がないことが分かる。

(11) 日本語だと気分によって命令したりお願いしたりする

これについては、これまでのことに次のことを付け加えたい。特に訓練の初期には、「ひと動作ひとコマンド」の鉄則をきちんと守らねばならない。だが、(5)でも詳しく述べたとおり、コマンドを出す人(飼い主、訓練士、使用者)の出す音は実際には統一性はなく、気分によっては、「ウエイトだよ」「ここでダウンね」「それはノー」「テイクして」と言うこともある。これでは英語の1語でコマンドを出している意味はなくなるし、反対にこうした修飾語句がついた日本語のコマンドでもよいことになる。

(12) 犬は意味ではなく音で覚えるから英語のコマンドを使う

人間がコマンドに英語を用いる必然性があるとして、それで日本の犬には英語が通じるのかという問いからこうした理由が説明されていると思われるが、「音で覚える→英語を使う」と結びつけるのは短絡的であろう。例えば、多言語国家のシンガポールは、警察犬の訓練をマレー語、英語、中国語の3言語で行っている。音で覚えるからこそコマンドを英語にする必然性は全くないことがよく分かる例である。犬にもよるが、段階を踏んで訓練すれば、ひとつの動作にいくつものコマンドをあてても犬は混乱しない。

(13) 使用者には英語で60の動詞を覚えてもらうが、名詞まで覚えるのは大変なので名詞は日本語を使う

一方で英語のコマンドを覚えてもらう必要があると言い、一方では覚えるのは大変なのでその必要はないと言っている。では実際の介助犬の訓練での使用例を見てみよう。

取る→ take、優しく→ easy、引く→ pull、放す→ give

*電気の紐を引くときは、“easy take/pull”と言った後、“give”と言う
触れる→ touch、ほめる→ good、高い(位置)→ up、ボタン→ button

*エレベータのボタンを押すときは“up touch button”と言い、できたら
“good touch”とほめる⁽¹⁶⁾

犬の訓練に慣れている人や、こうした一連のことばを意識的にコマンドとして使うのが上手な人、また英語がある程度できてその語が表す概念が分かる人ならば、上記のコマンドを読んですぐに理解ができるかもしれない。だがごく一般的に言って、こうしたコマンドはとても複雑で分かりにくい。むしろ、「優しく、取って／引いて／放せ」、「上、触れて、ボタン／よくできた」の方が断然分かりやすい。特に介助犬の場合は障害者の生活全般で活動するのでコマンドが多く、連続動作を指示しなければならない。そうであれば英語の動詞を覚えるのでさえ大変だということになる。

5. 英語を使う本当の理由

以上みてきたように、犬の訓練に英語のコマンドを使う必然性はまったくないことが分かる。では、家庭犬の飼い主はなぜ英語のコマンドを使うことに違和感を感じないのだろうか。また、補助犬の各団体はなぜこうした非論理的で説得力のない理由を公言して、英語を使用する正当性を主張し、その理解を求めるのであろうか。そして、マスコミを初め一般の人たちがそれについて疑問を呈しないのはなぜであろう。

家庭犬の場合、ある飼い主は訓練所(しつけ教室)で教えられたままに英語を用いているのであろう。飼い主は英語を使うことに抵抗はあるはずだが、

教えてもらっている立場と、何か特別のことをしているという意識がそうした違和感を払拭しているに違いない。「うちは訓練に出したんです」と自慢げに言う飼い主もいるほどだ。まさにコマンドが専門語として響いているのである。また、自分自身で訓練に英語を使おうと思った人は、なんらかの形で英語や英語圏（の犬文化）とつながりのある人だと推察できる⁽¹⁷⁾。

いずれにしても、家庭犬の飼い主が日本であえて英語を用いて違和感を感じないというのは、日本では暗黙のうちに英語が言語的なパワーをもっている証拠である。そうした言語的な権力構造の中にあって、日本人は英語ができることはすばらしく、賢く（頭がよく）、最先端であり、高級で、すてきで、格好よく、おしゃれで、特別なことであるといった幻想を抱かされている。これが英語コンプレックスとみごとに共存しているのが日本人の英語に対する意識である。中には嬉々として英語のコマンドを使っている飼い主もいる一方で、こうした複雑な英語主義を嗅ぎ取っている飼い主は決して英語のコマンドを使うことはない。

では補助犬の場合はどうか。なぜコマンドに英語を使うのかに対する表面的な答えは至って簡単である。それは、訓練の仕方の多くを英語圏から学んだために、そのまま英語のコマンドを輸入したのであろう。犬に指示を出すということに慣れていない日本人にとって、英語で出されるコマンドは際立ってコマンドらしい語感で耳に響いたはずである。それに英語をそのまま取り入れれば、ある動作にどんな日本語をあてればよいか、他のコマンドと重複することはないかといった煩雑な作業を省くことができる。

くわえて、日本では外国語教育の筆頭としてずっと英語が学ばれてきたし、英語はかなや和製英語、造語、また英語表記のままでも文中にするりと紛れ込み、日本語を侵食しているという現状がある。「パイオ (VAIO) にとりこんでアルバム (album) に。ネット (Internet) でPHOTO BOOKに」、「冬の2大ステディ (steady) 素材の女らしさをアップ (up) する新バランス (balance)」(カッコ内の英語は筆者) といった宣伝文⁽¹⁸⁾はすぐに探し出せる。もはや英語は日本語とは切り離せない馴染み深い言語であるとも言えるし、一方で、そうした常態化によって日本人のことばに対する感覚を麻痺させているとも言えるので

ある。

中国のように外来語をすべて漢字表記にする国もあれば、フランスのように英語の言語的侵略を憂慮してフランス語への置き換えを試みている国もある。日本語は、特にことばを造り出さずとも外来語の音をそのままカタカナに移し変えることで事足りてきた。これを利点とするか欠点とするかは意見が分かれるであろうが少なくとも次のことは言えるだろう。

例えば、いまや「リストラ」は本来の“restructuring”から少しずれて、多くは「リストラクチャリングによる解雇」の意味で使われている。だが、この語が日本に入ってきた当初は「リストラクチャリング（企業再構築）」と紹介されていたはずである。「セクハラ」も「インフラ」もそうである。また、あることがどのような過程を経て今の状況に至ったかを調べるシステムを示すことば“traceability”は、現在「トレーサビリティ（追跡可能性／生産履歴の追跡／履歴書）」などと説明されている。ここで問題なのは、英語の専門語をカタカナ表記し、それに日本語の意味を付記している点である。このような語の紹介の仕方では、ことばとして最終的に残るのはカタカナ表記である。それに、英語の意味のまま使われるならまだしも、運が悪いと本来の意味から遠く離れてしまうこともある。英語の専門語を日本語の中で使っていく必然性があるのならば、「追跡可能性（トレーサビリティ）」の順にして、日本語の専門語を定着させるべきであろう。こうした言語に対する姿勢そのものが無意識のうちに英語支配を受け入れていることにつながっているはずだ。

中村敬は「英語で夢をみれば国際人」という広告のコピーが「なんとなく人を納得させてしまいそうな効果があるのは、『英語』という言葉が持っているオマジナイ性のためである」とした上で、「ある特定の外国語が、特定の個人ではなく社会全体として『オマジナイ』的性格を持つようになるのには、背後に国家間のアンバランスな力関係があるからだが、『オマジナイ』は、それを唱えている人間をしばしば催眠状態にしてしまうため、事柄の本質を見えなくさせてしまう危険性がある」⁽¹⁹⁾と言う。コマンドを際立たせるために日常の日本語ではなく、かつ日本人になじみがあり覚えやすいことばという

理由で英語が選ばれていることがこの日本で自然に思えるのは、こうした英語支配が背景にあればこそである。ただ、そうした呪縛から解放されてみれば、日本語で犬と充分意志疎通ができるのにもかかわらず、わざわざ英語を使うことが如何に奇妙な現象であるかが分かる。言うまでもないが、日本では警察犬などの訓練ではこれまでも、そして現在も日本語が使われている。また、どの国でもコマンドはその国の言語を用いており、「コマンドに外国語を使う」などと言っているのは日本だけである。

6. おわりに

この日本の英語支配の状況から言えば、「英語をぺらぺら話して国際人になりたい」と真剣に思っている人に対して、「英語である必要もないし、ぺらぺら話せなくてもいいし、英語が話せることが国際人の条件ではない」ことを説明するには時間が必要だ。家庭犬や補助犬の訓練で英語のコマンドが使われている状況にも同じことが言える。それは、その背後には日本に蔓延する英語主義があり、そうした意識が無意識のうちに、なぜコマンドに英語を使うのかに対するまことしやかな理由を生み出しているからである。

補助犬の育成者や使用者たちは、これまで社会の無理解と闘ってきたし、それは現在も続いている⁽²⁰⁾。そうした中、2002年10月1日には「身体障害者補助犬法」⁽²¹⁾が施行され、これはこうした使役犬に関わる人たちにとって大きな前進であったと言える。そして使役犬が人間社会と関わる姿がもっと普通にみられるようになることは、犬のことを知らない一般の人にも犬がどのような動物なのかを知ってもらう好機になるに違いない。もちろん一般の飼い主が常にその一翼を担っていることは言うまでもない。犬を適切に訓練することなしに、人間と犬とが社会の中で心地よい関係を作ってゆくことはできない。犬への理解を深めるために、「犬を訓練する」ということの意味は重いのである。

だからこそ、犬の飼い主や訓練士は、なぜ犬を訓練するのか、訓練とはどういうものか、それはどのように行われるのかについて正確な知識をもち、社会に対して情報を発信する責任がある。コマンドに英語を使ったからとい

って、犬の訓練がしやすくなるわけでない。犬が日本語よりも英語によく反応するというのでは、犬が人間のことばをどのように理解しどのように行動するのかという事実を歪めて伝えてしまう。そして、日本で英語のコマンドを使うという状況が英語主義を促し強化して、日本語や英語についての間違った認識を広めることにもつながっているのである。

註

- (1) 使役犬は作業をする犬全体を指し、補助犬は特に「身体障害者補助犬法」で定められた盲導犬、介助犬、聴導犬の3つの使役犬を指す。
- (2) これまで犬の「訓練」と言えば、警察犬のような特定の使役犬の専門的で特殊な訓練を指していたため、多くの飼い主は「しつけ」という柔らかいことばを使っている。「しつけ」と「訓練」については、「しつけとは犬に命令や指示を与えなくとも飼い主にとって都合のよい行動を犬が自発的にしてくれる、犬が日常の生活の中で自発的に従属的な行動を取ることができる、飼い主や特定の人だけに従うのではなく、どの人間にでも従属的な犬に教育すること」で、「訓練とは、犬に命令や指示をして、そのとおりの動作や行動をさせ服従させること」(藤井聡「動物たち」日本動物愛護協会、1999年)という説明もあるが、家庭犬のしつけに用いているのは使役犬と同じ、基礎の服従訓練である。要は、訓練の程度と、犬に何を求めるのか、訓練をどのように(家庭犬として日常に/使役犬の作業として)応用するかの違いである。だから、飼い主が自分の犬を「しつけ」してもらうために犬を「訓練」に出すと表現することもある。また、この2つのことばの両方を指す「トレーニング」ということばもよく使われている。訓練をめぐる日常語は定義も曖昧で混乱していると言えるが、本論では「訓練」ということばでこれを統一する。
- (3) 「コマンド」は英語の“command”で、「命令する、指揮する；命令、号令」の意。「命令」や「号令」という語は一般で用いるには威圧的で堅苦しいため英語をそのまま用いることも多い。
- (4) 仔犬はまず母犬と同胎子(同時に生まれた犬)の中で初めの社会化をし、その後は外でいろいろな人や動物(犬)と接することで次の社会化をする。適切な社会化ができないと、散歩時にほかの人や犬を極度に怖がったり、攻撃的になったりする。

- (5) 犬の問題行動とは、吠える、咬む、飛びかかる、散歩時に引っ張る、室内の物を壊す等の一連の（人間にとって）相応しくない行動を指す。
- (6) また、犬は高い連続音に対して興奮し（＝動く）、低くゆったりとした音に対して落ち着く（＝止まる）という習性がある。ほめるときには高く楽しい声を、しかるときには低く厳しい声を用いると効果的である。また、高く短く“down”（伏せる）のコマンドを繰り返すと犬は走って戻って来、音を下げながらゆったりと“come”（こい）のコマンドを出すとその場で伏せるということも起こる。（後者はボーダー・コリーを用いたテレビ朝日、『たけしの万物創生』、放送年月日不明）
- (7) ここでは北海道盲導犬協会を例にとったが、日本における盲導犬第1号（1957年）を育成したのはアイメイト協会である。
- (8) 聴導犬も英語圏から訓練方法を輸入している。電話が鳴っていることや訪問者のチャイムを犬が知らせに行ったとき使用者が出すのは、両手のひらを上に向け肩をすくめる動作“shrug one's shoulders”で、「一体何のこと？」の意味を指す視符である。
- (9) 本文引用以外で検索したのは、盲導犬関連団体としては、(財)北海道盲導犬協会、(財)日本盲導犬協会、(社)兵庫県盲導犬協会、(財)中部盲導犬協会、介助犬関連団体としては、介助犬を育てる会、関西介助犬協会、日本介助犬アカデミー、日本介助犬トレーニングセンター、日本パートナーズドッグ。（2002年10月、検索）
- (10) 『盲導犬クイールの一生』（秋元良平、石黒謙吾、文藝春秋、2001年）、『動物訓練士になるには』（井上こみち、ペリかん社、1998年）の中でもなぜ英語を使うのかについての理由が説明されている。
- (11) 「世田谷区動物フェスティバル」（2002年10月27日）における介助犬デモンストレーション時の訓練士の話から抜粋、要約。
- (12) 極端に性差化された「女／男ことば」は書きことばで目立ち、特に外国語の会話体の翻訳においては顕著である。佐々木恵理「翻訳にみられる性差化とジェンダー意識—『自然な日本語』への技術」研究発表『ことば』22号、現代日本語研究会、2002年。谷部弘子「新聞報道の外国人談話に見る男女差—文体と終助詞使用の関係を中心に—」『ことば』17号、現代日本語研究会、1996年。
- (13) 本文の日本語訳は筆者。Levin, Caroline D. *Living With Blind Dogs* Lantern Publications, 1998, p.91

- (14) 盲導犬との初めての歩行訓練を使用者は「はずかしくてね」ということばに続けて、「街なかで、犬に『オーケー』だとか『待て』とか。人前で声を出すというのができなかったです、最初」と語る（近藤靖『さよなら、盲導犬ミッキー』幻冬舎、2002年、p.41）。この本に登場するのは北海道盲導犬協会の犬であるが、コマンドは日本語である。
- (15) 例えば、基本的なコマンドの“good”は形容詞、“down”は副詞で、命令形として使うときにはどちらも間投詞の分類になる。またアイメイト協会では、名詞でも“bridge”“chair”“corner”などは英語、「きつぷ」「かいさつ」などは日本語のコマンドである。
- (16) インターネットの「介助犬協会」のページより抜粋、要約。なお、名詞の“button”は英語表記であった。発音は英語[bátan]と日本語[botan]ではずいぶん違う。
- (17) 例えば、ハワイとつながりがあり、夫が英語人の早見優のコマンドは英語、ファッションモデルの川原亜矢子のコマンドはフランス語である。また、妻が日本人、夫がドイツ人の場合は、夫の姪が訓練が上手だということでドイツ語で訓練していた（テレビ東京『ポチたま』、2002年9月放送分）。単なる個人の趣味ということを除けば、多くの場合はさまざまな力関係の中でこうした言語の選択が行われているはずである。日本人がアメリカで犬を飼うときにはコマンドは英語になる可能性が高いが、反対に、日本在住のアメリカ人は日本語を使わないだろう。また日本で、夫が外国人の場合はその言語になり、妻がアメリカ人の場合は日本語になるか英語になるかは微妙なところであろうが、妻が中国人の場合は日本語になるであろう。日本では、英語を初めとするヨーロッパ言語を優れているとみなし、それ以外の言語を劣っているとみなす傾向にあるので、こうした言語の選択はあたかも自然であるかのように思えてしまう。
- (18) 順に、コンピューター「バイオ」（ソニー）、雑誌『スタイル』（講談社）の新聞広告。
- (19) 『外国語教育とイデオロギー 一反＝英語教育論』近代文藝社、1993年、p. 15、p. 19。
- (20) 『ベルナのしっぽ』（郡司ななえ、イースト・プレス、1996年）には、著者がアイメイト（盲導犬）を使い始めた1980年代の初めのさまざまな社会の反応が書かれている。また、『盲導犬誕生』（日本ライトハウス監修、ミネルヴァ書房、1997年）、『ありがとうアトム』（本岡修司、廣済堂出版、2001年）も参照のこと。
- (21) この法律により、公共の鉄道や施設、スーパーマーケットなどで、補助犬を伴う障害者の入店拒否が違法となった。

参考文献

- 石田俊浩・裕美(2000)『介助犬が家族になったとき』WAVE出版
- 上地安貞(1991)『英語の人間関係学 摩擦を生まない異文化間コミュニケーション術』ぎょうせい
- 大石俊一(1990)『「英語」イデオロギーを問う—西欧精神との格闘—』開文社出版
- 大塚敦子(1999)『犬が生きる力をくれた』岩波書店
- 鈴木孝夫(1985)『武器としてのことば 茶の間の国際情報学』新潮社
- 津田幸男編(1990)『英語支配の構造 日本人と異文化コミュニケーション』第三書館
- (1993)『英語支配への異論』第三書館
- 中村敬(1989)『英語はどんな言語か 英語の社会的特性』三省堂
- ダンカン, スーザン(1997)『ありがとう、ジョーイ・モーゼス』古武家勝宏訳、ペットライフ社

*ここで挙げた以外の犬の行動学、訓練、また人間と犬との関係学の書籍等の参考文献はウェブ上で公開しているので参照のこと

<http://plaza29.mbn.or.jp/~anzutotsubame/0library> (2002年12月現在)

(ささき えり)